

パパを亡くされた母子の再出発の物語

私たちが安堵感に包まれる場所、AIMS

病気で親を亡くした子どもたちの心のケアに取り組むAIMS。2014年にご主人を亡くされた長澤さんは、ふたりの娘さんとともにAIMS主催のグリーフケアプログラムと保護者の会に参加し続けています。ご家族にとってAIMSとはどんな場所なのか、参加してからのご家族の心の変化を伺いました。

【取材・文・撮影●鈴木健太】

抱えきれない悲しみも
AIMSなら共有できる

長澤さんが、医師からご主人・宏さんの癌を告知されたのは、2013年の6月でした。
「ステージ4の大腸癌でした。いつも元氣な主人でしたので、にわかには信じられませんでした」。

それでも下を向かず、長澤さん一家の闘病生活が始まります。長澤さんご夫婦は当時5歳と3歳だった娘さんに「パパはこういう病氣になったけど一緒にがんばろうね」と伝え、宏充さんは治療しながら通勤し続けました。しかし、2014年夏には容体が悪化。それでも家族想いの宏充さんは、7月には箱根へ、8月には軽井沢へ家族旅行に出かけました。

「主人も、家族4人の思い出を娘たちになるべく作ってあげたいとの想いがあったはずですが、点滴の打ち方を医師に習い、現地では私が点滴を打ってあげながら旅行しました」。

長澤さんの献身的サポートがあったものの、軽井沢へ行った一週間後の8月30日、宏充さんは38歳で天国へ旅立られたのです。

「直後は、急に風景から色彩がなくなるような感覚でした。いつも4人でいたのに、ひとり欠けてしまったのですから。土日に娘たちと公園へ出かけても、他のパパのいる家族を見てると、そちらだけが色鮮やかな世界に見えてしまったのです」。

ふたりの娘さんも、公園で仲良く



「グリーフケアプログラムでは他の親御さんにも育児の助言を頂けることも」と長澤さん

遊んでいる父子を、じっと見つめていることもあったといいます。幼稚園の同級生の親御さんたちは3人を励まそうと、食事に誘ってくれることもあり、そのときは長澤さんも気分を紛らわせることができました。

「皆さんのサポートは本当にありがたかったです。ただ、家に帰ると主人がいない。一人では抱えきれないほどの悲しみが襲ってくる。そのとき『同じ境遇の人に会って話をしたい!』と強く思ったんです」。

長澤さんは、宏充さんの闘病中に偶然読んだ新聞記事で紹介されていたAIMSのことを思い出し、その年の11月、グリーフケアプログラム(※1)に参加することに。

「このプログラムは子どもの心のケアを目的としたものですが、それとは別室で保護者の会(※2)も行われていました。皆さん、私の話をよく聞いてくださり『こんな風に感じてるのは、私だけじゃない』って、すごい安堵感に包まれたんです。5、10歳のお子さんをもつ親御さんが多

長澤春奈さん
立夏子ちゃん(8歳)
南緒ちゃん(6歳)

心優しい春奈ママとしっかり者の立夏子ちゃん、天真爛漫な南緒ちゃんという長澤さんご一家。宏充さんを亡くされた2014年以来、計10回ほどAIMSのグリーフケアプログラムに参加。

AIMS設立のきっかけは……

AIMSは、現代表・高井伸太郎さんのお姉さまである故・小林真理子さん(元NHKアナウンサー)の強い想いからスタートしました。

2011年、43歳という若さで小林さんは逝去されました。「風邪もひかない元氣な体質」とご本人も思っていたが、体調の異変に気付いたときには胃癌のステージIV。「卵巣にも腹膜にも転移している」と主治医から余命を告げられました。「自分のことはすぐに受け止められけれど、何より心配だったのが幼い娘のこと、その心でした」と生前の小林さんは記しています。

幼く、まだ十分に自分の想いを周囲



娘さんを抱っこする、元氣だった頃の小林真理子さん。

に伝えられない娘の心のケアはどうしたらいいのか——調べていくと日本にはそのようなケアやサポートを中心にしている組織がなかったのです。「ならば、私が創ろう」。母としての大きな想いが、AIMS設立の第一歩でした。

※1 大切な人との死別、離別などに伴って経験される深い悲しみ、怒りなどの思いを、正面から向き合ったり、寄り添いながら受け入れていくことを目的としたプログラム